



↑ 軍事教練（昭和初期・於上大津村手野小学校）

前号では、今の生徒さんからは想像もできないような明治期の厳しい試験の状況を紹介しました。今回はさらに皆さんが耳にしたことも無いような「発火演習」ということについて取り上げ、その実際と時代的背景について考えてみることにしましょう。明治の昔の土中生たちの、変化する時代に揺られながらも息づいていた心意気のようなものを感じ取っていただければと思います。

発火演習？

明治中期、中学校の重要な行事の一つに「発火演習」があった。発火とは銃に実弾を入れず、火薬だけを詰めて撃つことである。つまりカラダマ射撃である。撃つたとき薄い煙がパツと立ち、ズドンズドンという大きな音が鳴り響く。発火演習は実戦の状況を設定して発火を行った軍事訓練の初歩的なものであった。使った銃は村田銃（旧本館資料展示室に展示されている）である。この銃は剣や背囊とともに雨天体操場裏手の武器庫に大切に整然と保管されていた。『進修』第3号によれば、第一回発火演習は明治33（1900）年1月12日に木田余で行われた。その後、年2回程度行われるようになるが、演習場は近辺の木田余、高津や遠くは谷田部、石岡方面などであった。日露開戦前年の明治36年2月7・8日に行われた発火演習は大規模なもので、その様子は『進修』第5号（37年2月）の「広岡原附近発火演習記事」（第3回生高須四郎（後の海軍大将）に詳しく記録されている）

再現「広岡原附近発火演習」

4・5年生を1個小隊の南軍と3個小隊の北軍に分け、体育科教師が南北両中隊の指揮官となる。指揮官は演習を統括、監督する統監部の命令に従うことが事前に決められていた。

南軍は7時に、北軍は8時に学校を出発。南軍は土浦での戦鬪に敗れ水海道に向って退却、北軍は南軍を迎撃するため水海道に向って進軍することを想定。警戒行軍をとりながら上高津西南方高地に到達。南軍はその高地に散開し、また後方の林の端に陣地を構えていた。9時35分南軍は北軍を認めて発射。北軍は南軍陣地に向って進撃。両者の距離300m。戦鬪開始。段々たる（響き渡る）銃声は天地を動かし、叱咤の声は木魂に響きて其壯観といふ計なり。10時南軍は戦況不利に陥り退却。10時25分、上



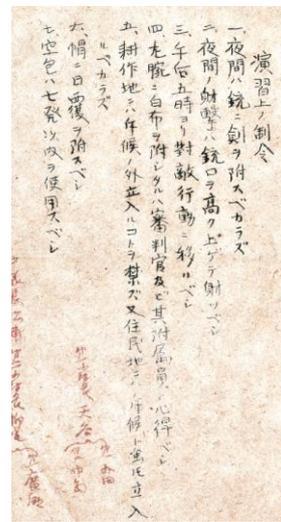
若き日の高須四郎氏 →

広岡北端の林に沿って散開、防御の態勢をとったが、北軍の攻撃を受けてまた退却。そして上高津南方の長い隘路を隔てた林を陣地とした。しかし何の計略あつてか、南軍はこの要害を捨てて退却。11時25分北軍は南軍のゆくえをつかめず、演習を中止、昼食とする。南軍は道に迷い統監部から離れた所であり、命令は届かなかつた。1時5分演習再開。北軍は防御の態勢をとりつつ行軍。3時40分館野に到着し、目的を達成。谷田部に南軍とともに宿泊。

《武勇の気魄》ここにあり

発火演習は前記の演習2日目のように天候に恵まれない時もあった。前年の35年3月1・2日に石岡地方で行われた第5・4・3・2学年合同発火演習の時も雨であった。霏々たる雨、寒気颯として、泥濘を踏んでのような悪天候の中での演習。この記事を書いた生徒は、勇壮にまた活発に、困苦に耐え欠乏に屈せざる……吾人の快とす

発火演習の注意事項を示した文書



る所なり、實に壯雄且激烈なる演習をなせしは、實に吾人の一快事たるなり」と結んでいる。生徒を代表してのこれらの言葉は、困難なことをやり遂げた充実感や誇らしい気持ちを表しているが、また生徒たちが演習の目的を理解し《武勇の気魄》をもって真剣に取り組んだことを暗に語っているように思える。

「発火演習」の時代的背景

発火演習は明治期の他の学校行事と関連づけることで、その重要性を知ることができる。遠足は一種の行軍であった。修学旅行も汽車を利用したのは都市間の移動の時だけで、目的地及びその周辺ではこれまた長距離を歩くという行軍が行われた。

また中学校でも行われていた四方拝（元旦の宮中行事で、天皇が天地四方の神に五穀豊穰・天下泰平を祈る儀式）や紀元節の式典では、生徒達による一斉射撃や分列行進などが催された。例えば明治35年1月1日の四方拝では、式後に4・5年生による一斉射撃が行われた。その様子は「轟然又轟然、耳を聳する許りなりき」（『進修』第4号）とある。同年2月11日の紀元節では式後、4・5年生徒の中隊による教練が実施された。その様子は「立派に武装した凡百の小兵士、縦隊に横隊に、喇叭と共にしつじつと運動せる面白さ、勇ましさ、思はず手をあげて喝采したり」（『進修』第4号）と述べられている。

この時代の学校行事の多くは、教練の内容を含んでいたものであり、このような状況の中で行われた発火演習であった。生徒達は自分たちが、国家に期待されていることを十分に承知して、その期待に沿うように努力していたのである。

大正14（1925）年に「陸軍現役将校学校配属令」が公布され、軍事教練は年を追うごとに本格化していき、日中戦争、太平洋戦争の軍国色の濃い時代へとつながっていくのであるが、明治期にはその軍靴の暗い響きはまた無かつた。